演奏とは何か　演奏するという意味あるいは目的について

yakateru

演奏をするという目的には、およそ次のようなものが考えられる。

① 弾いていて楽しいという自己欲求を自己の中で追求するもの
② 人に演奏を聴いて欲しいという対人的関係の中で欲求を満たすもの
③ 演奏という行為を通じて奉仕したいというもの
④ 演奏という行為を通して生計を立てたいというもの
⑤ 記録として残しておくために行うもの

このなかで①については、純粋に楽しいという気持ちが喚起される範囲内で成立する。また、この喜びの中には、難曲に挑戦するという達成感・征服感を感じることを目的とするものもあろう。また、芸術家という範疇に入るのであろうか、美の追求という非常に高度な目的、あるいは意識を持って演奏する場合もあろう。ただし、ここまでの高度な演奏であれば④のプロとしての活動と重複するし、プロは単に技術的な演奏披露だけで行っているとは考え難く、そこには、美の追求が含まれてくるであろう。

次の②については、最近売り出し中のネントメグロ出身のギタリストであるミロシュが嘯いているように、女性にもてたいからやっているというものも含め、人に聴いてもらい何らかの賞賛を得たいという目的とするものである。

③については、定年後の暇な時間を活かした慰問コンサートのように、自分の特技を社会貢献に役立てたいという殊勝な心で演奏している場合もあろう。ただ、このケースの場合はほとんどが②にも該当するものと思われる。

④は、言わずもがなのプロギタリストの行為であるし、⑤については、特別な例として考えられる。

そして、これら①から⑤までの目的は、ひとりの人間（演奏者）のなかですべてを包括した場合も容易に想像できる。弾いていて楽しく自分の中で大きな満足を持ちつつ、それでは物足りないため人に聞いてもらい賞賛を得る、あるいは、社会奉仕活動として慰問活動をおこなう、あるいはプロとしてお金をもらって演奏をする。そして、その行為を CD 等の形で記録しておく。

しかし、ここに含まれないもので、世間で言ういろいろな活動に取り入れられている目的が抜け落ちている。

それは、「道」の追求である。ギターを演奏することを通じて、精神的な、あるいは霊的により高度な体験を経験し、人間を昇華させることである。

すべての修行に対して共通で言えることは、ある領域に達成すると、すべてが変わるということである。かつて、プロのギタリストになるためには、３万時間の練習が必要であるといわれた。この意味は、ある程度の訓練を行うと、そこである別の領域に入るということである。

その領域は、仏教の世界でいうところの「悟り」に近いのかもしれないが、「悟り」を求める気持ちが強く、何らかの切っ掛けが訪れると一気に「悟ってしまえる」ということと異なり、必要な訓練時間があるという点であろう。

例えば、自分の経験した例で言えば、英会話である時から一気にヒアリングができるようになるとか、デザインの勉強という認識でカメラを持って街に出ているとある時から被写体が自分から飛び込んで来るという結構身近な経験につながるものである。

さて、この「ギター道」というものの到着点は、どこにあるのか、それはなになのか、今の所は不明である。しかし、この不明であること自体が、求めていく価値として存在することの大きな理由であると考えられる。求めていくものがわかっているもの、たとえそれが「夢」の実現ということであっても、そこに具体的な目標があるということとは異なり、到着点が見えないために努力するということが「道」というものの性格であろう。

この世界での道（みち）は、ある場所へ行き着くための必要な機能（道具）として存在するものであるが、「道」は、そのプロセスそのものを目的化させる。

さて、そのプロセスを目的化するということの意味についても、これから実践を通して考えていきたいと思う。

2013.11.07

風景と音楽と映画と文学　音楽を聴くという行為、演奏する行為とは何を求めるものか

バッハ叢書　第３巻（バッハの美学）を読みながら

yakateru

「風景」「音楽」「映画」そして「文学」に共通するものとして時間の経過という要素がある。「風景」は、ほかの３つと違い芸術的なものではないかもしれないが、絵画と異なり「風景」には時間要素というものが関わる。確かに風景写真という絵画的な一面がほかのものとは異なるが、映画のワンシーンというものに近いのかもしれない。その辺も含めて、整理してみよう。

さて、映画や文学に接しているときは、そのストーリーを常に意識している。そうでなければ、あらすじというものがわからなくなり、人間の行為の関係性が見えなくなるからだ。認知症を患った義母には、ドラマを見ても、一枚一枚のシーンを感動することはあっても、全体が見えていない。例えば、桜の最多シーンが「きれいだねえ」ということはあっても、なぜそこに桜のシーンが使われていることを理解していないため、そのドラマが表現したい真の部分は見えていないということになる。

風景は一番この４つから離れているかもしれないが、音楽は、映画や文学と同じように、ストーリーがある。音楽には、構成があり、起承転結がある。にも関わらず、私たちは、この音楽を認知症を患っている義母同様に、一つ一つのフレーズの甘美さに酔うことで満足しているのではなかろうか。J ポップスのような安易な音楽で使われる歌詞を、詩と同様に、あるいは、ショートストーリーとして理解している場合は、音楽の中の物語性に着目しているので、少なくとも全体の構成が見えて音楽を理解していると言える。

クラシック音楽は、もっと長大である。しかし、長大であるからこそ、そこには構成がある。物語の組立のようなものがある。さきほど聴いていた BACH のカンタータには、そこの歌詞が全体の構成を理解する鍵というか本質的なものがある。歌詞を理解して聴いていなということは、全体の構成を理解していないということである。歌曲よりも器楽曲を楽しむことが多い自分にとって音楽とは、今まで、ほとんど構成を意識したことはない。ただ、GUITER を弾いている時に、シャコンヌを含み変奏曲などの場合は、ある程度その曲の流れを踏まえて弾いている。しかし、フーガやファンタジアのような曲の場合は、そこまで見えていない、というか見ていいない。その時その時の流れの中で、感じることだけを楽しんで弾いている。

これは、料理を味わうのに、自分の好きな単品を次から次に注文し、そのつづばらばらに楽しむということであり、コース料理のように料理の流れを楽しむということでもなく、幕の内弁当のように食べる順番を任されて自分で食べる流れを組み立てる場合とも異なることに等しいのではなかろうか。まあ、これまで、コース料理でもその順番、味わう時間の流れをしっかり楽しんだということでもないし、幕の内弁当の食べ方でもそのような順番を構成して食べるようなことはほとんど意識していない。

しかし、その単品の味を楽しむことに加えて、組み合わせの味を楽しむこととすれば、その面白さや感動は、数倍に広がるような気がする。

話を音楽に戻して、聴き方、弾き方には二つの段階があって、一つは、漠然と全体のことは理解していたとしても、そのストーリーや構成を意識して演奏するのではなく、その場その場の味を楽しむ楽しみ方と全体のドラマとして楽しむ楽しみ方の二段階である。

BACH のシャコンヌの場合は、全体が３つに構成されており、一つ一つが変奏曲となっていることを理解している。そのため、ニ長調に店長するときの喜び、静けさを味わうことができる。第１部の重そうな部分をとって、突然このニ長調からはじめると、その響きは同じでも心の中の響きは全く異なったものとなる。また、このニ長調への転調の際には、次の転調への期待も生じている。

音楽を聴くときには、その曲の構成を理解する努力を行うことが必要で、ただ、その時間時間に身をゆだね、甘美でないとことでは居眠りをするようなことのないよう、映画の途中で寝てしまったらせっかくのストーリーがわからなくなることで面白みが激減することと同じように思うようにしなければいけない。

さあ、４０年以上音楽を聴いてきたが、まだまだ遅くない、今からでも、甘美さだけに頼らない、頭も使った聴き方をするように努めよう。

2014.03.15

（続き）

先程は、時間という概念に着目して「風景」「音楽」「映画」「文学」を論じてきたが、次の視点として、鑑賞者が「理解する」という行為を通して比べてみる。「映画」にしろ「文学」にしろ、そこには言葉というものが介在しストーリーを構築していく。その言葉で、その作品メッセージ性を理解しようとする。当然、舞台芸出的なものが視覚的に協力することはあっても、ただ、言葉もなく、映像と音楽だけの映画作品というのは、ディズニーのファンタジアぐらいしか思い浮かばない。バッハ叢書では、「音楽」は理解するものでなく、外部のものを再構築する作業であるという。理解ということの定義をどうするかという問題はあるが、納得するということを基調にすると、それは言葉での解釈としていいのではないか。一方での音楽や風景は、そこに言葉は入ってこない。味覚と同様に、感覚である。

先ほどの稿で、音楽を理解するためには、例えばカンタータであればその詩を理解しなければいけないという記述をしたが、ここでは逆に、音楽を理解するには・・・、ではなく、音楽は理解するものでなく感じるとるものであるとする。ここで大切なことは、「感じる」だけでなく、「感じ取る」ことである。「感じ」そしてそこから自分のものとして再構築する。さて、この再構築するというのは何か。そこに先ほどの理解ということが再現される。音楽を聴いている時には、理解するのではなく感じ取ることが必要なのであるが、感じ取るためには、その曲の構成を理解する必要が有り、それは、受け取る側の受像機をそのようにセットしなければいけないということである。理解した上で、理解することなく聴くのが音楽の聴き方なのであろう。ただし、歌謡曲のような詩を中心とする音楽は、音楽というよりは物語として位置づける方が聴き方としては近いのかもしれない。物語を読んであげることと同じように、物語に曲をつけて語り聞かせることが歌謡曲のような音楽の存在なのであろう。従って、受け取り方は、歌謡曲と、言葉を理解しない外国ポップスとは全く異なる、あるいは、包括したものであると考えるのがいいかも知れない。歌詞付きの音楽には、音楽と物語の二つの要素がいっしょに合体したものであると。そう考えれば、カンタータの音楽も理解できる。それをより音楽として聞くために、言葉は理解しないが、言葉の中身は理解している状態で、そのカンタータを聴く。

さて、同じように「風景」を捉えてみようか。風景も、ただ見るだけではなく「観取る」ことが必要ということだろう。「鑑賞」という言葉はそこから生まれてきた言葉かも知れない。風景を鑑賞するという見方。これは結構、風景の見方としてあたっているのではないだろうか。2014.3.17